

ネイション考

渡辺 金一

一九八九年十月、ライプツィヒをはじめとする田舎
イツ民主共和国の諸都市で市民が街頭デモンストレー
ションに立ち上ったとき、一枚に参加者たちの口をつい
いて曰たのせ、

“Wir sind das Volk!”（我々はfolkだ）
と「やハナコアルだ」（DIE ZEIT 20.
Oktober 1989）。

いいじめられてくるのは、長じるやスクワから抑
えつけられていた自分たちのアイデンティティを取り戻
そうとする要求の熾烈さであり、このfolk意識

の高揚なかりせば、おそらく東ドイツでも、「現在社会
主義」からの解放は達成できなかつたであらう。

folkとナシオン。これはともに、日本語訳され

る年の年は奇しくもた、フランス革命「1789年」に当
た。

“Liberté, égalité, fraternité!”（自由、平等、友
愛）

をスローガンに立ち上ったのはナショナ（nation）や
あた。クルツィウス（Ernst Robert Curtius, *Die
französische Kultur*, Stuttgart/Berlin 1930.『ヘッ
ス文化論』大野俊一訳、みすゞ書房、111頁）は、「全
フランスが共感を覚え、相愛を感じるのは、ナシオン
としてであり、この言葉の前にはいかなる対立も消散
してしまふ」（^{（一）}）。

folkとナシオン。これはともに、日本語訳され

旧教と新教という信仰上の分離線は、ほのかつての国境の上を走ることになる。ボミアンがなお一層重要なと考えるのは、十七世紀に入ってまでヨーロッパ史を規定していた南北の国家間の政治的対立に、十八世紀からは、東西の国家間の対立がまず上のせされ、ついでそれに取つて代るという事実である。そのさい向いあう両極は、海洋国家イギリスと大陸国家ロシアであり、それぞれは自国を中心として同盟関係をつくりあげる。国内で社会システムを近代化するさいの政治形態は、片や立憲制であり、片や絶対制である。

だがボミアンによれば、ヨーロッパ史がはらむこうした分離傾向は盾の半面にすぎない。それと並んでヨーロッパ史は、文化生活の側面で、少くとも二回の統合を経験した。第一回は中世盛期および後期においてであり、ラテン文化の教養人エリートやかれらの集う中世大学によって坦われたスコラ学やヒューマニズムとなつて開花した。第二回は啓蒙主義として一括される十八世紀の「文芸のくに」(République des Lettres)であった。第一回のヨーロッパ統合に終止

ヨンに対抗して、多くの場合、この双方に対抗して、自らを保持すること、あるいは、ただたんに自分と隣り合う諸ネイションに対し自らを保持すること、である。これに対し垂直的とは、それぞれのネイションがうちにかかえているさまざまな集団の間の紛争を解決し、統合を実現することである。そのさい個々のネイションが歩む道行きはその都度異つており、独自であるが、終着点は押しなべて似通つており、また若干の例外を別とすればほぼ時を同じくしている。そしてまたそれぞれが独自のネイション形成の過程には、大幅に平行現象がみとめられる。

ヨーロッパのネイション形成の出発点に立つ^{エトナ}族は、自分たちの首長、祭司、戦士、そして平民を持ち、また自身の信仰、伝統、慣習を持つ。そこにはまたさまざまな言語集団があつて、お互の間で理解が成り立たないか、ほとんど成り立たない。さらには、世襲的なさまざまの法的身分、とりわけ奴隸かそうではないかによってお互いに区別される諸カテゴリーがある。このエトナの対極をなすネイションにあつては、

符を打つのは宗教改革であり、信仰と典礼と教会暦とともににする共同体は解体する。これにたいし第二回のヨーロッパ統合は、汎ヨーロッパ的なコスモポリタン・エリート文化に対する十九世紀のネイション文化の反逆の犠牲となる。だがボミアンによれば、それらはたんなる反動にとどまなかつた。ヨーロッパはそれをむしろ飛躍台として、その都度新たな局面をきり拓くことになつた。

ネイション文化の担い手となつた十九世紀の教養人エリートは、啓蒙主義時代の先行者のようにもはや自分たち専用の古典文化の普遍的価値を追求し再現することにかわつて、今や完成されつあるネイションを前にし、かれらのために、かれらの過去としての中世に眼を転じ、かれらの創造力の再発見につとめることとなつた(ロマン主義)が、ボミアンによれば、ネイション形成そのものは、水平的並びに垂直的方向で実現された。水平的とは、いずれのネイションも他の諸ネイションに対し自らを保持すること、とりわけ自分を支配するか、ないし、自分が支配する他の諸ネイシ

そのメンバーは同一の法的身分を享受し、公民身分に属することになる。かれらは同一の権利を持ち、現行法規の定める共通のルールにしたがつて公的生活に参加する一方、同一の義務を負う。そのさい、年齢、性別、健康状態などの点で区別が設けられるにすぎない。もちろんネイションはさまざまな社会的カテゴリーをかかえており、後者は互に、方向を異にするとともに対立し、時に暴力を伴つた紛争にまでゆきつく利害関心を持っている。だがこれら社会的諸カテゴリーといえども、自身ネイション集団へ所属しているということは、そのメンバーによって、自分たちを統合する大枠としてうけとられている。その枠組は、かれらをその他の点で分つ何ものにもまさつて強力であり、したがつて地域上、経済上、信仰上、職業上の対立に優越し、またエリートと一般民衆、都市住民と農村住民、神を信する者と無神論者、ブルジョワジーとプロレタリアート、といつたいすれの差異をも凌駕する。

ボミアンによれば、いまみた出発点と到着点、エトナからネイションへの過程では、次の六つの力が互

は一様に国民ということになろうが、ドイツとフランスがたどった夫々独自の、否、対照的とさえいえる歴史を反映して、この二つの言葉には、大きなずれがみとめられる。それは、一方でドイツ語の「オルク」が、血統と同じくする共同体、したがって、いわば民族という意味をも、色濃く含んでいるという点である。それを端的に示すのが、二百年以上もまえに、ロシアの女帝エカテリーナ二世が、出身地ドイツのヘッセン、ヴュルテンベルク、ブフアルツ、バイエルン、バーデンなどから移住者をまねき、ヴァルガ地方にさまざまな優遇措置をもつて定住させた「ヴァルガ・ドイツ人の、現在の子孫たちの場合であろう。かれらは今日なお自分たちをドイツ人「オルク」と感じ、一たん祖先の地に戻れば、ドイツ政府もかれらをドイツ人「オルク」としてうけいれる。このように「血統の権利」(jus sanguinis)が「オルク」たることの基準とされるドイツにたいし、フランスではナシオンたることの伝統的基準は「土地の権利」(jus soli)にある。たとい両親がフランス人ならずとも、フランスに生れ、フランスの教育

をうけ、フランスで通用する政治ルールを受けいれることを約束するその子供はナシオンとしてうけいれる。きまってひかれる例だが、イヴォ・リヴィの名でイタリアに生れたフランスの人気俳優イヴ・モンタナ然りであつたし、ウクライナ人の両親から生れた前フランス首相ピエール・ベレゴボワ然りであった。こうしてフランスのナシオンにあつては、歴史的に形成された観念が優勢であり、市民権の統合力に絶大な信頼が寄せられている。「ナシオンとは日々の国民投票のことだ」(ルナン)といわれるゆえんである。⁽²⁾

ヨーロッパの歴史のなかでネイション(国民と書いたもの)だが、日本語特有の含意が持ちこまれて新たな問題がおこる可能性があるので、以下ネイションで一括する)をどう位置づけたらよいであろうか。偶々最近読んだ、ワルシャワ生まれ、パリのエコール・デ・オート・エチュード・アン・シャンス・ソシアルで教えるボミアン『ヨーロッパとその諸ネイション』(私が使つたのはドイツ語訳 Krzysztof Pomian,

Europa und seine Nationen, Berlin 1990)は、問題を整理する上で大変参考になった。かつて私たちはもう一人の同じポーランド出身の歴史家ハレッキの『ヨーロッパ史の地域的・時代的境界と区分』(Oskar Halecki, *The Limits and Divisions of European History*, London/New York 1950)を持つた。ただハレッキがこの書物を著したのが冷戦の真只中だったのに反し、ボミアンの方はその終結を体験している点で、夫々がおられた歴史状況は全く異なり、過ぎ越し方、行く末について両者が懐くヨーロッパ像もかけ離れている。前者にとって東西対立の構造は不動の前提だったのに對し、後者は、ネイション、国家、イデオロギーなど、さまざま次元の対立を克服してはじめて、ヨーロッパ史上第三回目(後述)の統合への期待もあるう、と結んでいる(*tabula rasa* ヨーロッパ)。

一九一四年まで続いたヨーロッパは別に一枚岩だつたわけではないとボミアンは言う。歴史を最も遡れば、ローマ帝国の北の境を走る国境が、文明人の住むところと、野蛮人の住むところとを分けていた。またそのローマ帝国は東と西とに分かれたが、それは、キリスト教が国家の宗教として受容されるにおよんで、ローマとコンスタンティノープルの間での教会上、教義上での対立と重なりあうことになった。そしてまた、さきの国境も、ボミアンによれば、西ローマ帝国の消滅で別に意義を失つたわけではない。宗教改革の結果、

ボミアンが一四四頁の小冊子で展望するのは、今から千数年前、蛮族がローマ帝国の国境を越えてその領土内に居を据えた時にはじまり、フランス革命、ナ

×

×

×

×

ポミアンが一四四頁の小冊子で展望するのは、今から千数年前、蛮族がローマ帝国の国境を越えてその領土内に居を据えた時にはじまり、フランス革命、ナ

いに、時には力を合せ、時にはさまざまに攻めぎあいながら、はたらいた。

一、支配王朝 その代表者たちは傘下の住民の目からみて、ならびに外からみて、支配地域を人格化する存在であり、しばしば聖化されて帰依と忠誠の対象となり、集団的アイデンティティ感情の結晶点となる。

二、国家 自身のヒエラルキーを備えた官僚制と軍隊機構といかえてもよく、固有の伝統と象徴をもち、組織的権力と強制力を行使して臣民を管理する。

三、都市、州、カントンといった如き領域的単位そこでは、国家が若干の上級権を保留していることは、すべての住民、ないし、かれらによって選挙された機関のひとしく認めるところだが、なお自身の集団的アイデンティティ感情は持ち合せている。ただそれは、人ではなく、社会生活のさまざまな慣習形態とむすびついている。

四、文化的エリート並びに文化的諸機関 その関わる精神諸科学、教育、芸術の諸分野は、集団的思い出や思い込み、言語の共同性、領域、過去と未来などを

永続的に客觀化して支える柱としての機能を果す。

五、宗教的諸機関ならびに宗教的諸権威 具体的にはその中央と地方的附属機関を擁するカトリック教会、オーノドックス教会、プロテスタント教会、ユダヤ教ラビ。

六、そして最後にネイションそのもの、ないし、そのいくつもの構成要素 これら要素はすでにエトナの段階で外からのプレッシャー、および自らのかかる諸機関からのプレッシャーに反応するばかりでなく、多くの場合ニシアティヴを取るため、受動的な客体たるにとどまらず、自身の歴史の共同製作者となる。

ネイション形成にさいして働いた諸力をポミアンは以上のよう類型化するとともに、この六つの力がヨーロッパの諸ネイションの運命を定めたとき、それら諸力のその時々の役割や、その時々の重要性は、ネイションごとに違っていたとする。

かれによれば、いざれにせよ、国家にとっては、王朝の諸問題並びに自己固有の問題を自らの利益になるように処理することが中心課題であったが、その結果、

フランスで革命がおこり、国家のネイション化に帰着した。爾後、国家は、ネイションによってえらばれる議会のもとにおかれることになる（デモクラシー）。

ポミアンによれば、ヨーロッパの西では、イギリス、フラン西に続き、十九世紀の経過でネイション形成がほぼ完了するが（ドナウ帝国、ロシア帝国、そしてバルカンなどの東についてポミアンは章を改めて論じて）、事実固有の問題を含むので、いざれ改めて取上げたい）、そこでは、ネイション形成は、パターンを共通にするいくつかのグループにまとめられる。すでに十九世紀中葉、それが平和裡に完了した北欧のスウェーデンとデンマーク、絶対主義のゆれもどしがある南欧のスペインとポルトガル、そして、いざれも領域的團体からネイションが浮び上るスイスとオランダとベルギー、がそれである。ただ、かつて自らの王朝と國家をもっていたものの、続いて十三—十七世紀にそれを失ったカタロニア人、バスク人、ウェールズ人、アイルランド人、ノルウェー人、アイスランド人などについては、ノルウェーがスウェーデンから独立をかも

とったのを例外とすれば、他は問題を未解決のまま二十世紀に、そしてその多くが今日まで持ち越した。そして最後に、かつてドナウ帝国に属していた(但し部分的に)ドイツとイタリアではネイション形成の上で数多くの注目すべき類似点がみられた。西ヨーロッパのこれらネイションの前途には若干の例外を除いて、工業化と、それに伴う諸問題が待ちうけている。

ナポレオンの失脚から第一次大戦までの百年間に西ヨーロッパでおこった戦争は唯五つ、中葉の十五年間に集中し、クリミア戦争を除けば、すべてイタリアおよびドイツの統一と関係している。この時期が終ると、西ヨーロッパは四十年の平和を経験する。それは中央ヨーロッパにまでひろがる。とはいえこの地域は、ロシア帝国、ハプスブルクないしドイツ帝国に編入された諸民族の、(不成功に終った)ネイション形成の企てによってたえず繰り返してゆりうごかされる。

ウイーン会議から第一次大戦にいたる時期、外交の黄金時代が訪れる。勢力均衡のシステムも戦争の勃発は防げなかつたものの、戦争は相手を絶滅せしより、

また垂直的統合もすでに相当進んでいたまさにその時であった。ヨーロッパの諸ネイションの統合が進展すればする程、近隣ネイション同士の紛争は新たな性格を帯びる。それはひとり国家だけでなく、一ネイションの全メンバーをもまきこむからである。こうして戦争はもはや軍人だけの専管事項でなくなり、ネイションの誰もが戦争準備をしなければならないものと化す。ヨーロッパの勢力均衡を不安定化するのはひとりこのネイション・イデオロギー(括弧なしのナショナリズム)だけではない。それにおとらず重要なのは軍事技術の進歩である。軍備競争が解き放たれ、伝統的な価値体系は空洞化され、戦闘のさいの武器(ますます進歩する工業化の産物)の効果性が最重要となる。二十世紀はじめの国際情勢のなかで、世界は、いつ大戦争がはじまてもおかしくないものとなる。以上がボミアンの著書の大筋である。民族、ナショナリズム、地域などの見出しが新聞の紙面で相繼ぐ昨今だが、中世初期が「^{エトナ}民族の世紀」⁽⁵⁾だとするなら、ヨーロッパの十九世紀が「ネイションの世紀」であることが、納得

相手方に自分の意志を、明確な限界づけのもとで認めさせる一手段にすぎず、したがって外交の延長にすぎないものとなる。戦争中でも外交はつねに出番を待っている。また戦争は軍人だけが専ら関わるものとなり、祖國の祭壇にその生命をささげる軍人には、それだけ一層一般国民の敬愛の念が集まる。戦争はたといおこつても、短期であり、地域的に限定され、「文明化」する(ここで、たしかフランスソワーズ・ロゼー演ずるところの昔のフランス映画「女だけの都」が想い出される)。いすれにせよ「民族紛争」とは大ちがい)。

だが、状況は次第に変化する。十九世紀の七〇年代以来、とりわけ二十世紀への変り目に、ヨーロッパの勢力均衡のシステムは、外交努力をもつてしても救えない程の危機に陥る。このシステムはまず、ドイツ、フランスの間で、平和的関係のもとでくすぶりつづける紛争によって掘り崩される。⁽⁴⁾加うるにそれは、ドイツによるアルザス・ロレーヌ併合と関わる点で全く新たな火種の性格をもつている。併合がおこったのは、フランス・ネイションの水平的統合がすでに完了し、

的につられただ。ただあれられなかつた問題に、たとえば、ネイション形成にさいして経済の果した役割(「国民経済の成立」)のごときがあろう。

× × ×

十九世紀末から二十世紀初めにかけて四十年平和が続いたヨーロッパでは、知識人エリートたちが、多様ななかに共通の価値観を分けもつ一つの国際的サーカルをかたちづくっていた。ウイーンに生れ、そこで育つた早熟の文学青年シュテファン・ツヴァイク(一八八一一九四二)もその一人だった。そのかれの遺した『昨日の世界——ヨーロッパ人の回想——』(原田義人訳、『ツヴァイク全集』17・18)は、同時代証言としてその間の事情を伝えて余すところがない。

「四十年の平和は諸国の経済体制を強制し、技術は生活のリズムを速め、さまざまな学問的発展はある世纪の精神に誇りを与えた。われわれのヨーロッパのあらゆる国ではほとんど同じ程度に感じられたひとつのは隆盛が始まったのであった。都市は一年一年といつそう美しくなり、いつそ人口を増していく。……」

(17、二八四一五頁)

「ヨーロッパのあらゆる岸辺からわれわれの心に打ち寄せて来た、この活気を与える波は、すばらしいものであった。しかし、われわれを幸福ならしめたものは、同時に、われわれがそれと気づかなかつたが、危険でもつた。その当時ヨーロッパを襲つて荒れ狂つていた誇りと確信との嵐は、また暗雲をもともなつていたのである。……」(17、二九〇一九・貞)。

「今日われわれが落着いて考えながら、なぜヨーロッパが、一九一四年に戦争に走つたかを自問してみるならば、理性にかなつた理由はただひとつも見出せないし、動機さえも見出し得ないのである。いかなる理念のためでもなく、小さな国境の地域のためでもほとんどなかつた。私はあの力の過剰以外のいかなるものをもつてもそれを説明することはできない。それは、この四十年の平和のあいだにうつ積し、そして暴力的に爆発しようとしたあの内面的なダイナミズムの、悲劇的な結果だったのである。どの国家も突然、強力であるという感情を持ち、ほかの国も全く同じようにそうちの隊列であった。

(17、二九四一九五頁)

「一九一四年の夏、事態の急変を知つて、避夏先であるベルギーのオストエンデから最終列車でウイーンに戻ったソヴァイクが目にしたのは、動員された兵士たちの隊列であった。

「真実を重んずるために、私は告白しなければならないが、この最初の群集の出発には、何か堂々たるもの、感動的なもの、そして魅惑的なものさえ含まれており、それから逃れることは困難であった。そして、戦争に対するあらゆる憎しみと嫌悪とともにかかわらず、

感じているのだ、ということを忘れていた。各国はもつと多くを欲し、各国は他国の何かを欲したのであった。そして最も悪いことは、われわれが最も愛していきたあの感情そのものが、われわれを欺いたことであつた。すなわちわれわれの共通のオブティミズムであった。というには、各國は、最後の瞬間にには他国がしりごみするであろう、と信じていたからである。……」

(17、一九一九二頁)

「ああ、われわれはみな自分たちをその翼に乗せているわれわれの時代を愛していた、われわれはヨーロッパを愛していた。しかし、理性が迷妄を最後の時において妨げるであろう、というこの理性に対する信用の過ぎた信仰は、同時にわれわれの唯一の罪でもあつた。確かにわれわれは、壁面のしるしを十分な不信の念をもつて見てはいなかつたのである。しかし、不信ではなく、信ずるということが、ほんとうの青春の感覚ではなかろうか。われわれはヨーレスに信頼し、社会主義的「ママ」インターナショナルに信頼していた。鉄道員たちは彼らの同志たちを屠殺用の家畜として戦

この最初の頃の思い出を、私は自分の生涯において見失いたくはない。これまでにないくらい幾千、幾十万人々は、平和のときにおいてもつと感じていなければならなかつたこと、すなわち彼らは一であるということを感じたのであつた。二百万のひとつの町、ほとんど五千万のひとつの国は、自分たちは世界史を、けつして一度とはめぐつて來ない瞬間を、相ともに体験しているのだということ、各人はその微小な自我をこの燃え立つてゐる群集のなかに投じ、そこであらゆる利己心から自分を浄化するのだということを、このときにはじめて感じたのであつた。身分や言語や階級のあらゆる区別は、この一瞬間ににおいては、友愛の流れる感情に被い呑まれてしまつた。疎遠な人々も街頭で言葉を交わし、多年相避けていた人々も互いに手を握り合ひ、到る處に生氣のあふれる顔が見られた。各個人がその自我の高揚を体験し、彼はもはや以前の孤立した人間ではなく、彼は群集のなかに加わつたのであり、彼は民族「と翻訳されているが、原文のドイツ語は、本稿冒頭の「folk」であろう。尤もオーストリアであ

ってドイツではない。筆者]であり、それまで眼中に置かれてなかつた彼の人格は、ひとつの意味を獲得したのであつた。……」(17、「一八一・九頁)

だがこれが最後であつた。それはもはや一度とは繰返されなかつた。ツヴァイクも続いて記しているようには、一九三九年には大衆はもはや一九一四年と同じような感激をもつては燃えあがらなかつた。明らかにネイションの時代はすでに過ぎ去つていたのである。

(1) 明快な一般的指摘として、Eberhard Weis, *Zur Bedeutung von Absolutismus und Revolution für den französischen Nationalstaat und das französische Nationalbewußtsein*, 講文集 *Deutschland und Frankreich um 1800*, München 1990 所収。

(2) ただ最近、両国とも大きな軌道修正をせまられる。

ドイツでは、冷戦終結後の大量の難民流入と、これに反撥する極右若者の相づぐ難民収容所襲撃のなかで、難民に「重国籍を認めんべし」という主張がおこる。

フランスは、アフリカの旧植民地からの入国者が激化させる失業問題に直面して、伝統的な「土地の権利」

(共立女子大学教授・一橋大学名誉教授)

は、“invasions”の言葉までがとび出る。(2111年のトゥール・ボリティエの戦いの再現?)。

(3) 「いやだとえば、フランス国王ルイ十六世の宰相リッシュ・カリヨーがおこなつた、ネイション統一と強化のための施療案 (Vgl. DIE ZEIT 4. Dezember 1992, S. 90, von Michael Winter)」が想起される。それは、重商主義が「国民経済」の形成に対しても重要な性を新しくみなおすにせよ。そしてまた、フリードリッヒ・リッゲル *Das nationale System der politischen Ökonomie* に対するマルクスがおいた批評(1871)の読みかえしにも (Vgl. Isaiah Berlin, *Der Nationalismus*, Frankfurt a. M. 1990, S. 25 ff. い H. Ritter もさやか)。已く区画教説といふ。

(4) 「シトーネを独立した考察の対象に据えた近著を翻訳」 Michael Jeismann, *Das Vaterland der Feinde. Studien zum nationalen Feindbegriff und Selbstverständnis im Deutschland und Frankreich 1792-1918*, Stuttgart 1992.

(5) 指標「再編・廿世初期の地中海世界の理解のための一山田欣吾氏の近著に触発されてー」『創文』・九九[1]・七所収。